

編集後記

今回は七本の論考が寄せられました。この雑誌が日本文学学会の「言語・文学・文化」と装いを改めて、すでに十二号となりました。新しい雑誌としての歴史は、まだ浅いとはいえ、かつての「東海学園国語国文」とは、おのずから変化が見えてきました。バックナンバーを一覧しても、それはわかります。かつて「国語国文」は、研究論集としての性格が際だっていました。今は、そこに批評が加わりました。たとえば、マンガ映像コースの誕生によって、マンガ批評を掲載できるようになりました。さらに、人形劇の論考も寄せられています。かつての「国語国文」とは趣を異にする新たな視野が開けてきているようです。意図して編集した訳ではありません。新たなメンバーが加わって、おのずと開けてきたのです。これを好機として「言語・文学」にとどまらず、さらに広い現代「文化」の領域へ、批評の鎌を入れていっていいのではないのでしょうか。そんな清新さ必要ではないでしょうか。人文学部人文学科の、同学の雑誌として、さまざまな視点から、過去の古典を、そして現在の文化を論じ、批評する、そんな方向性が、もっと模索されてもいいように思います。来たる平成二十六年度から、人文学部は、新たな改組転換が構想されています。そんな時期を控えて、編集子の個人的な思いを記してみました。

(小林)

東海学園 言語・文学・文化

第十二号(通巻第七十一号)

平成二十五年 三月二十日 印刷
平成二十五年 三月三十日 発行 非売品

編集 名古屋市中平区二丁目九〇一番地
発行 東海学園大学日本文化学会

代表 小林 幸夫

電話 (五三)八〇一―二二〇一
振替 〇〇八三〇一五―二九三二二

印刷所 豊橋市下地町字宮腰二四

(有) イシグロ 高速印刷